



## モンテーニュとヒロイズム

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-08-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 寺迫, 正廣 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24729/00006364">https://doi.org/10.24729/00006364</a>

# モンテーニュとヒロイズム

寺 迫 正 廣

## 序

やや古くなるが、『フランス文学における英雄主義の領分』<sup>(1)</sup>という本がある。著者は小説家、評論家のピエール・アンリ・シモン（一九〇三—一九七二）。雑誌『エスプリ』の共同執筆者であり、晩年の十数年間はル・モンドの文芸批評も担当した。この本の執筆当時はフライブルグ大学文学部教授の地位にもあつた。表題に示されるように、これは中世から十九世紀に至るフランス文学の諸作品を英雄主義の観点から通覧したユニークな文学史である。

序文において著者は文学、とりわけフランス文学の特徴をまず次のように規定する。一般に文学は精神の理想化を嫌い、逆にごく普通の、もつといえ病いに苦しむ精神を冷徹に描き出そうとするものであり、その中でもフランス文学は特にその傾向が強く、超自然的成功の物語を次々に開陳したり、読者の夢想癖を刺激したり心に火をつけたりすることは少なく、むしろ人間的真實をさまざまな角度から活写し、精神を豊かにし、理性を満足させることにその主眼を置く。唯一、ロマニズムがこの傾向に逆らい、現実から想像へ、心理分析から叙情へ、性格描写から象徴へ移行しようと試みたが、長続きせず、すぐに写実主義へと引きもどされた。

P・H・シモンはこのように述べた上で、それにも拘らず、このいわば本流としての臨床医学的性の裏側に、フランス文学は英雄主義的性を合わせ持つていとみなす。フランスの作家たちは、現実描写に耽るあまり、偉大なるものをみつめ、高貴なるものを創造しようとする情熱を失つたりすることは決してなかった。フランス文学は英雄的理想主義の魅力も十分に備えているという。

そこで本書が成立するのだが全四二二ページ、十五章からなる叙述の一つの章がモンテーニュとその『エッセー』<sup>(2)</sup>の分析に当てられ、この思想家においてもヒロイズムを語れるとしている。これには少なからず驚嘆させられるのではないか。「私は卑しい輝きのない生活をお目にかける」<sup>(3)</sup>という言葉などに暗示され、通常思い描かれるモンテーニュ像はおよそ英雄主義的なものからはかけ離れているように思われるからである。早々と公職を辞し、無為と閑暇に身を委ねるモンテーニュ。批判者たちから懷疑主義者と謗られ、優柔不断の代名詞のように言われるモンテーニュは平凡を通り越してアンチ・ヒーローとみなす方が、一見ふさわしいと思われるほどだが、その意味でP・H・シモンの逆説的試みは大いに関心を惹く。

しかし、少し調べてみると、モンテーニュを英雄主義の観点で見よ

うとするのは、ひとりP・H・シモンだけではない。たとえば今世紀前半に活躍したエッセイスト、エリー・フォルム<sup>(4)</sup>も同じ見方を提示しているように思われる。そこで本稿では、この二人の見方を簡単に跡づけながら、モンテーニュと英雄主義の問題を検討してみたい。

\* \* \*

ところで「英雄」すなわちフランス語の *héros* の意味範囲は広く、もつとも多義的な語の一つであろう。ある研究者はこの語の定義を試みつつも、結局匙を投げている。<sup>(5)</sup>そこでP・H・シモンは不必要な深入りは避け、年代による語義の変遷と多様化、それと他の関連語との差異を検討し、そのことから語のイメージを浮き彫りにしようとしている。*héros* は語源的には神と人間との間に生まれた半神であり、その高貴さ、強さ、勇敢なる行為で民衆を導く存在であったが、十七世紀のアカデミー・フランセーズの辞典(一六九四年版)では、主たる意義として「勇敢なる戦士」が掲げられ、危険を恐れぬ大胆な行為によって偉大な功績をあげる人間と解説された。十八世紀になると、同じ辞書(第四版)において、先の半神、勇敢な戦士の意に加えて、第三の意義として精神的な意義が強調され始める。戦いにおける果敢な行為者の意に加えて、「高貴にして強靱な精神、有徳の人」の意が導入されてくる。この傾向は時代とともに強まり、ラルース社の十九世紀辞典やリトレでは、あきらかにこの意義に重点を置いている。リトレは「戦争において人並みはずれた働きをなし、輝かしい成功をかちとつた人物」とまず解説しつつも、「性格の堅固さ、精神の偉大さ、高い徳を有する人」という意義を前面に出している。

右の解説によってP・H・シモンは「英雄」の語義の中に「行為者」のみならず「精神」の特質が含まれることを確認する。そして次に関

連語との関係を見る。まず「偉人」|| *grand homme* 英雄が元来、向こう見ずの戦士であるのに対し、こちらは平和時にその力を発揮する存在。支配権も求めない。*héros* に精神的意義が付加されるにつき、その反発から強調された語という。次に「超人」|| *sur homme* これは世のため、人のために力を発揮するのではなく、自らの支配欲、エゴイズムから功績を上げる人物。孤高にして、しばしば憎悪すべき存在となる、いわば怪物。次は「聖者」|| *saint* 力と勇気を示し、民衆を導く点で英雄と同じだが、英雄が自己の個人的特質の発揚をねらうのに対し、こちらは自己を無に帰することにより、民衆の幸福と安寧に尽くす。従って偉人にも増して隣人愛に貫かれた存在。最後に「賢者」|| *sage*。英雄が死をも恐れず、理性が不可能とみなすことまで為しとげ、歴史や思想に予見不能の新しきをもたらすことがあるのに対し、こちらは危険より静けさ、戦いより平和、死より生を愛し、世界を組織、管理することに大いなる力を発揮する。偉人に近い存在。これらの語以外にも関連語は存在する(たとえば「天才」|| *génie*、  
「巨人」|| *colosse*、  
「怪物」|| *monstre* など)が、P・H・シモンは以上の四語を比較検討し、そこから次のように英雄像を要約する。すなわち「自己の精神傾向を尊び、個性を肯定し、自己の力を賛美しつつ、さらに高き完成へと自己実現するために、厳しく自己コントロールすることを知る存在である」と。少しく抽象的で理解しにくい短かい表現の中にすべてを盛り込むように求める方が無理であろう。むしろこの要約は英雄の行為者としての側面、精神的なその双方を包含しており、いずれの語義にも解釈し得る便利さを有しているようだ。ともあれ、「英雄」と人間の精神のありようが結びついていることを確認して、このような英雄のイメージとモンテーニュとがどう

つながり、またどうつながらないのか検討することにしよう。

## 一、英雄とアンチ・ヒーロー

まず、P・H・シモンの考え方を見よう。モンテーニュは『エッセー』において、自己の思想を語るに熱心であるのみならず、身体的特質から性格に至る自画像の製作にも余念がない。来たるべきパスカルの激しい非難にも馬耳東風。飽きもせず、あれやこれやと書きつけている。そこでP・H・シモンも——意識的であるかどうか断定要素がないが——まず、後者の描かれたモンテーニュ（むしろミッシェルと呼ぶべきか）の方から考察している。

彼はまず『エッセー』の記述を断片的に寄せ集めて作られた常識的、教科書的モンテーニュ像を示す。曰く、「良心と判断にはすぐれているが、自己を知るといつても、それを高める気はなく、容認するだけの優柔不断な弱い性格。」これは教科書にしてもかなりひどい代物だと思えるが、何故かP・H・シモンはこれに同調してつけ加える。実際、幼年時代を見ても、父親に甘やかされ、眼覚しに優雅な音楽の調べを用いてもらったり、学校でも、少しばかりラテン語ができたために一目置かれたのが悪く、徳育には役立つ本ばかり読んでいた。更に成人して法官になったのはいいが、すぐに嫌気がさし、早々と退職し、郊外にある城館に隠棲するという体たらく……という風に、英雄的観点からは、はなはだ不都合な要素が列挙されていく。

無論、これはより効果的な反論を打ち出すための戦略であろうと予想されるのだが、実際一つ一つに弁明が試みられてはいるものの、それらは著しいまでに迫力を欠く。モンテーニュが自分のことを「怠惰」とか言ったとしても、文字通りに受け取ってはならぬ、といった説明

はあるが、反論はそこまでで、名誉回復には至らない。モンテーニュが負わされた負のイメージの正のそれへのダイナミックな逆転は見られない。それ故にか、論者自身が「こうした修正作業を続けて、本当にモンテーニュの中に偉大な精神が宿っていることを明らかにできるだろうか」と問い、「非常に困難」と自らに答えてしまう。モンテーニュが精力的に描き続ける自画像を見れば見るほど、P・H・シモンの眼には英雄とは反対の姿が焼きつくようだ。彼は自分の思惑とは反対の姿の列挙をやめることができない。彼は続ける。

モンテーニュには野心がない。パリで一番になるよりペリグーで二、三番の方がよいのだ。野心はないのに虚栄心はある。まだどこか鯨のにおいが抜けないのに、貴族であることを強調し、国王侍従となり聖ミッシェル勲章を佩用していることや、ローマ市から市民権の認証状を与えられていることを、奇異なまでに素朴に自慢する。こうしたことは殆んど滑稽ですらある。さらにモンテーニュは非常な女好きであったが、愛に対しては冷淡である。情熱的恋愛に至ることはない。結婚も理性婚だ。要するに、女に対しては官能の快樂を、妻に対しては家事管理の能力を求め、決してそれ以上には進まないエゴイストである。唯一の例外は友情に対する姿勢で、ラ・ボエシ(Etienne de La Boetie)という稀有な友人によって、きわめて高貴な友情が維持された。モンテーニュは、自分とは正反対の、嚴格で、純粹で、情熱的で、学識深いこの友人によって、魂の高貴さが存在することを学ぶだろう……。

P・H・シモンは右のように延々とモンテーニュを扱き下ろす。唯一、友情が例外だとされるが、この高貴さにしてもラ・ボエシに依るもので、最初からモンテーニュに備わっていたものではないと言う。

結局、美質は何もないということだ。栄誉を求める野心もなく、恋の情熱も知らず、ただ虚栄の虫に取りつかれているだけの男。彼はモンテーニュの自画像の中に英雄を求めて、「エセー」を読みすすめるのだが、逆に嘲うべき「愚か者」<sup>リタイキユール</sup>を捜し当ててしまったようだ。英雄どころか、全くのアンチ・ヒーロー。それも通常のイメージを更に強めかねないほどに貶められている。誠に皮肉なことだが、彼の場合、モンテーニュの非英雄性をあげつらう時の方が、その反解釈<sup>?</sup>兼明の提示よりも熱がこもってしまうのだ。俗言にいう、ミイラとりがミイラになるとは、まさにこのことであらう。

こうして、ここまでの展開では、「モンテーニュにおける英雄主義の魅力」<sup>(7)</sup>を描き出そうという彼の意図は完全に失敗している。しかしながら、この部分までに対象とされたのは「エセー」に描き出されたミシエルの方であって、描く主体のモンテーニュではない。そこで次にP・H・シモンは自己観察者、人間探究者、思想家としてのモンテーニュに眼を向け、これに期待をつないで何とか英雄を見つけ出そうとする。

\* \* \*

モンテーニュがボルドー高等法院の参事となつて以来(一五五六)、その同僚ラ・ポエシとの交際が始まる。二人の「完璧な」友情については「エセー」に詳しいが、わずか六年余りでこの畏友は流行病に斃れる。モンテーニュは故人の遺言により、その豊富な蔵書を引き継ぐが、それとともに厳格なストア主義的思考法も受け継いだとするのが大方の見方である。

P・H・シモンもこの考え方を取り、「エセー」の語り口にも何かしらヒロイックな調子が感じられるとみなす。彼はまた次のような視点

も導入する。すなわち一五五九年に、ジャック・アミヨ(Jaques Amyot)によるプルタルコス『対比列伝』の仏訳が出ると同時に、フランスには古代英雄信仰が広まり、モンテーニュにも強い影響を及ぼす。その結果「エセー」には古代人の、人生に対する不屈の姿勢や何もものをも恐れぬ勇氣を讀める記述が多い。たとえば「皇帝たるもの立つたまま死ぬべし」<sup>(8)</sup>とか「古代ローマ人は子供たちに、坐わつて学ぶようなことは何も教えなかつた」<sup>(9)</sup>とか「ラケグイモンのある少年は、盗んでおなかの中に隠した狼から腹を喰い破られても声一つ上げなかつた」<sup>(10)</sup>など枚挙にいとまがない。

P・H・シモンは右のことから、モンテーニュ自身が常に勇敢であるとはいえないにせよ、少くとも勇氣について語ることはできた、として、ここにモンテーニュの英雄主義的側面の一端が覗かれるのではないかとし、この観点を補強するために「エセー」から次の一節を引用している。「私は自分が弱いからといって、尊敬に値する人々の強さや勇氣に対して当然払うべき尊敬を、決して変えはしない。地上の泥の中を這いまわつてはいるが、ある種の人々の遙か天の高みにある英雄的魂のけだかさを指摘するのにいささかも躊躇したりしない」<sup>(11)</sup>

前半部分を読む限り、P・H・シモンの立論は崩壊するように見えただが、ここへ来て少し息を吹き返したかのようだ。この印象は次の項、モンテーニュの死に対する姿勢の考察で更に少し強まる。彼は有名な断章「哲学することは死を学ぶことである」を喚起し、モンテーニュは死を恐れない。少くとも知性の努力によつて死の恐怖を克服しているように見える、と考える。死は宇宙の法理の一つであり、悪でもなければ常軌を逸したものでない。希望もなく恐れもなく真正面からこれを見据え、常に「旅立ち」への心の準備をしておけ。不安を祓

いのけ、死を乗り越え、死を軽蔑せよ。このストア派の見地からモンテーニュが死に対峙していると、「死の蔑視」こそは英雄主義の第一の条件ではなかったか、と声高に言う。

こうしてやっとモンテーニュ精神における「英雄主義の領分」を見出したかに見えるP・H・シモンは次のようなパスカル(Blaise Pascal)の非難には、わずかに一瞥を投げ与えるに過ぎない。「死についての彼の全く異教的な意見は許し難い。いったい、せめてキリスト教徒らしく死のうという気がないのなら、信仰なんてすべて諦めた方がいい。彼ときたら、その本のどこを見ても、卑怯で安楽な死にかたばかり考えているのだ。」<sup>(12)</sup>パスカルのこの文章は、彼の立場とは正反対である。まさに一八〇度の意見対立であるにも拘らず、P・H・シモンは、その深刻さを意に介さず、あるいは敢て無視して、こう言うのみである。「確かにキリスト教的死とは相容れないが、モンテーニュはこの死、すなわち人生の全ての日々を審判する最後の時に備えて、熱心に思考を深めていたのであり、「卑怯」とか「安楽」とかは当たらない。」こうしてさらりと受け流して、相手にしようとしなない。パスカルも軽く見られたものである。だが、無論、この正反対の議論が、このまま放置されて良いわけではない。従ってこれは章を改めて検討することにしたい。

問題は残しつつも、ともあれ、モンテーニュの精神の英雄性の一面に達したP・H・シモンだが、そのまま一気に突き進むのかと思えば、そうはならず、またしても逆行。「彼はヒロイズムと出会うが、それはいわば接線ののであって、すぐ離れてしまう。読書の影響が強い時、あるいはラ・ボエシの影が濃厚な時、英雄的になる。」モンテーニュの本性には英雄的なものはなく、墓の向こうからの声が聞こえた時、一

時的に英雄性を帯びるといふのか。これではモンテーニュにはまるで主体性がないことになる。しかし『エセー』の記述が前後二〇年間の思考の全体を包含しており、相互に矛盾する言説をそのまま取り込んでいることを思えば、この逡巡は全く不可解というものではないと言えようか。いずれにせよP・H・シモンは再び反対方向の言葉を『エセー』から拾い集めてくる。「いかなる人間も坐わることができないような、あの哲学の高みは私を恐れさせる。」<sup>(13)</sup>「私は、人生のあらゆる快樂を切り捨て、犠牲にするディオゲネスの英雄的精神よりも、スキピオの人間的な性格の方を好む。」<sup>(14)</sup>「私は一度も、帝国や、王国や、人に命令するそれらの高い身分を望んだことはない。私はそういう方向を目指さない。そうするには私はあまりにも自分を愛し過ぎている。」<sup>(15)</sup>

これらの引用を並べて、彼は注釈する。ストア派の雄々しい禁欲も、世俗的な栄光も、崇高な試みも、危険をも省みぬ偉大なる行為もみなモンテーニュを怖れさせる。そうするには彼は「あまりにも自分を愛し過ぎている」のだ。おそらく、この *Je m' aime trop* という言葉ほど英雄性とかけ離れた言葉はないだろう。英雄とは、自己の内部の安寧指向の低級なエゴイズムを打破し、危険など省みず、たとえ同じエゴイズムに発しているも、至高善に向かう人物を指すだろうが、この言葉はこのようなイメージからあまりに遠い……。

彼は、死に対する態度に一度は英雄性を見たものの、こうしてまた正反対に引きもどされ、「いったい如何にして、このエゴイストの内にヒロイズムを見い出せばよいのか」と悲痛な声で叫ぶ。しかし、それでも諦めず、また振り子が揺れるように、英雄への道をたどる。そしてモンテーニュにおける「判断行為の厳しさ」にたどり着く。モンテーニュは自ら、書くという行為の全体が「判断」の試みであると

述べているが、P・H・シモンは、まさにそこに英雄的なものを見ようとする。

彼は書く。モンテーニュが早々に隠棲し、城館の書齋に引きこもるのは、自己を世間から隔離し、全き自由の下で事物を判断することのできる環境に身を置かねばならぬという信念からである。高等法院時代に裁判、すなわち「判断する」ことが仕事であったが、裁判官たちの質の悪さ、いい加減さや、裁判制度そのものへの疑問から、本当の判断はそこではできぬと悟り、何ものにも、何人にも干渉されぬ静かな環境を求めたのであろう。また市長就任の際の「市長とモンテーニュは二つである」という発言にしても、全存在を公務に没頭させた場合、我を忘れ、判断行為にも狂いが生じかねないという危惧から出たものであって、怠慢の故にはない。従ってモンテーニュが「無為と閑暇を何よりも好むのんき者」というのは字義通りに解釈することは当たらない。彼は「みせかけののんき者」(faux nonchalant)なのだ。あらゆる制約を逸れた、自由な知的環境を維持し、「判断に常に主人の座を占めさせる」ための戦略なのだ。一刻も休まず判断行為を続けること。誰にも歪められることなき判断の自立を維持すること。これは誠に困難な作業であり、その実現には不屈の勇氣、高貴なる精神が要求される。モンテーニュはまさにそれらを備えていたのである。従って、ここにヒロイズムを認めることができるが、これは心情のヒロイズムというより、知性のヒロイズムと呼ぶのがふさわしい……。

右のように、P・H・シモンは、前半で自ら批判したモンテーニュの自画像解釈に若干の修正を施しつつ、「判断行為者」としてのモンテーニュの中に英雄性が見られるとする。何故、モンテーニュにとつて「判断」が、それほどまでに重要な事柄であったのかについての解

明は為されないが、ともかく彼は捜し求めた「英雄」の発見に成功したようだ。従って、考察にもここでピリオドが打たれるかと思われるが、彼は今一度、留保する。否定する。そして言う。モンテーニュの知恵は、やはり英雄主義という語とはうまく馴染まないことを認めよう。結局、「調和ある人間性の達成」という意味でのユマニスムという語で言い尽くすことができるのだから……。敢えて、この語を用いるとすれば、ポール・アザール(Paul Hazard)の言う「控え目のヒロイズム」*héroïsme discret*がふさわしいだろう。

以上が彼の考察のあらましである。いわゆる正・反・合の動的展開はなく、正と反の繰り返しに終始した形になっている。いたずらな断定は避けたいという配慮もあるが、ダイナミックな逆説を期待した読者としては、「どっちともいえる」というこの結論には、いささか落胆を禁じ得ない。モンテーニュに貼りつけられた「優柔不断」の商標が、彼にも伝染したのであろうか。

『エッセー』の記述が、著者自身認めているように、非常に錯綜したものであることが右のような議論展開を招来したことは認めるが、P・H・シモンはあまりにもテキストの意味を文字通りに受け取り過ぎてはいないだろうか。個々の文章、言葉の表層にこだわら過ぎ、結局モンテーニュの言葉の森に踏み迷ってしまったと思われる。今少し、全体を高めから俯瞰し、演繹的思考法を取れば、別の展開になり得たかも知れない。次に見るエリー・フォールのモンテーニュ論はそのような意味で、P・H・シモンとは全く対照的であり、鋭い直観的認識によって、その真偽の問題は別として、非常に鮮明な像を描き出している。章を改めて、それを見ることにしよう。

## 二、最初の近代的精神

エリー・フォールは医学を修めた後、美術研究に転じ、フランス美術史研究家、評論家、エッセイストとして、今世紀前半に活躍した。

ここに取り上げる著作は『モンテーニュとその最初の三人の息子たち、シェイクスピア、セルバンテス、パスカル』<sup>(19)</sup>(一九二六)である。その最初に置かれた「モンテーニュ」の章の要約を試みてみたい。

彼はまず『エセー』の文体に着目する。モンテーニュの言葉と語りは具体性に溢れ、深い叙情をたたえている。言葉たちは食卓に並んだ食物の匂いを立ち上らせ、咀嚼する歯の音を伝え、また書齋の中を歩きまわるモンテーニュの足音を響かせる。抽象的な語といえども、筋肉、骨、神経、内臓を備え持っている。だから「血のしたたる文体」(style sanglant)と行って良いかも知れない。こうした文体はモンテーニュに天与のものであるが、同時に、これは当時の学者たちの晦渋な文章の批判でもある。「もしも私が専門家だったら、彼らが自然を学術化するのと同じくらいに、私は学術を自然化するだろう」<sup>(17)</sup>

『エセー』の文体を自己の文章で再現する意図があるのではないかと感じさせる程にエリー・フォール自身の文体が生氣に満ち、イメージに富んでいる。それをここに移す力量が筆者にないのを無念とするしかないが、彼は概略以上のように述べ、冒頭からモンテーニュの反骨精神、皮肉に富む批判精神を垣間見せる。そして次に、P・H・シモン同様、自画像に眼を向ける。重複する箇所もあるが、引用しよう。「モンテーニュは女好きだ。肉体の優雅さが殊更に彼を惹きつけるのだ。また美食、美酒を嫌うどころか、それらを腎臓や尿管にまで詰め込んでしまう。<sup>(18)</sup>それに彼は痴呆だ。ああ憐れな男よ。回転の鈍い、軟

弱な頭よ。優柔不断で活気のない性格だし、記憶力の弱さでは評判と名声を得られるくらいだ。何ごとについてもほんの少しは知っているが、フランス流には何も知らない。彼のフランス語は彼固有の野蛮さの故にひねくれている。美德にしても行きあたりばったりで、偶然的なものではない。自己の内に見出す空しさや弱さを白状しかねないし、何もかもが粗野だ。飛翔を知らず地上を這いまわっている。あるいは息切れして、前にも進めない馬だ。踊りも戦いも剣術もだめ。音楽ときたら手も足も出ない。手先も全く不器用ときている。自分の世紀に愚かさ、空しさ、無為を持ち込んだ男だ。家事のことも商売も取り引きも畑仕事も何にも知らない。食糧や布の値段がどれくらいなのか皆目見当もつかない。人が、あなたがこうなのはもつと難しい、高尚な学問に心を奪われておられるからでしょう、と言うのを聞くと、彼はその買取りがたまらず苛々する。そうではない。彼は単に愚鈍なだけなのだ。ところが、その彼は言う、私は自由な魂を持っていると。これはまた何たる素朴さ、何たる自負心の無防備な陳列であろうか。」

モンテーニュ自身の言葉を巧みにちりばめながらE・フォールはこれ以上は不可能と思われる見事なアンチ・ヒーロー像を描き上げた。しかし彼は、P・H・シモンのように性急に修正を試みるようなことはせず、ひとまず、そのようなものとして受け入れる。そして言う。「この優柔不断の虜になつてゐる、選ぶことのできない精神には、その揺籃期からある特異なしるしが刻みつけられていた。多くの不具者や、ある種の偉大な精神に刻みつけられてゐるのと同じしるしが……」

これは何を意味するのであろうか。「特異なしるし」とは何か、具体的な解説はないが、恐らく天才的な資質のことを指すのではなからうか。人並みのことが為し得ないというのは、人並み以下を意味すると

は限らない。逆に人並みはずれた能力の証左であるかも知れない。今見た自画像はすべからく負の要素で構成されているが、それ自身が、実は価値を逆転させる可能性を孕んでいる。「選ぶことができない」のは選ぶ能力がないのではなく、選ぶに足るものを見い出せないのかも知れない。真に価値あるものが現われるのを待っている状態を意味するかも知れない。こうしたことからモンテーニュの「できない」も、「敢て選ばない」の代替表現である可能性を否定できない。他の人が争って何かを選択するのを見ても、納得しない限り追従はしない。それが、いかにも鈍重で回転が鈍い、軟弱だ、という形容に結びつく。「しるし」とは何かこのようなものかも知れない。

以上は推測であるが、全くの当て推量ではないだろう。というのもE・フォールはこのあとすぐに「懐疑主義」の検討に入るからである。選ぶこと、否、選ばないことと懐疑主義とは直結する。彼はモンテーニュの懐疑的精神を、全ての判断を中止する懐疑主義として批判する人々を、逆に次のように批判する。

馬鹿者はモンテーニュが優柔不断で、全てを疑う懐疑主義者と非難するが、では今日、この現代人の中に、彼の同時代人たちが信じていたことを信じる者がたった一人でも居るであろうか。彼の時代には、教皇派、ユグノー、カルヴァン派、ルター派、正統カトリック、非正統派、キリスト教徒、偶像崇拜主義者、プラトン信奉者、アリストテレス信奉者、プロレマイオス狂信者、コペルニクス派、アヴィセンヌ派、ガリレイ派、パラケルスス派等々多種多様な学派があつたが、仮にこれらが同じ信仰を持っていたと仮定して、現代人に一人でもそれに与する者があるであろうか。一体これらのものから、彼らが信じていたものから何が現代にまで残っているだろうか。モンテーニュの懐

疑はこのような点をしつかりと踏まえた上で把握されねばならない。「我々の狂気は私を笑わせない。私が嘲うのは我々の知恵である」<sup>(19)</sup>「最も知られていないことこそ、最も強く信じられる傾向にある」<sup>(20)</sup>モンテーニュがこれらの言葉で批判するのは人間の軽信である。彼は事物をもっとよく知らねばならないのに、人々はあまりに早く知り、彼に学ぶ余裕を与えない。人々は互いののしり合い、非難し合つており、モンテーニュが唯一人、皮肉や自尊心そして驚きの感情を道連れに、知的孤独の道を歩んだのだ。彼は言う、「私は真理を確立するためではなく、真理を探究するために思惟する」<sup>(21)</sup>彼も真理が一つであることは疑わないが、特定の個人や主張に真理が存し、他は真理にあらずという排他主義は認めない。論拠はどうにでもつけられるものだし、その意味では全てが正しいのだ。故に選択を迫られても選びようはない。軽信を避け、疑い、問い、少しずつ真理を追い求める道しかない。これは懐疑主義者の態度ではない。懐疑主義は知の可能性、有効性そのものを否定するから、問うことすらしないのに対し、モンテーニュは引用にも明らかなように、真理に達するために問い、疑い、探究を休まず続けるのであるから。

E・フォールはモンテーニュの、いわゆる「方法的懐疑」を以上のように説明する。モンテーニュを懐疑主義者と規定したのはパスカルであつたが、彼は神と宗教の問題を考察するには人間理性は余りにも無力なので、この問題については判断を差し控えるべきだ、というモンテーニュの考え方について、この語を用いた。それがいつの間にかこれらの問題以外、すなわち人間に関する事柄についても何も判断できない優柔不断な懐疑主義者ということになったのである。「エセ」は判断の試みの書とされ、実際、諸々の事象——宗教まで含め

た——の判断に満ちているのに、このようなイメージが定着したのは実に奇妙な現象であつた。それはともかく、自己の思考法を確立したモンテーニュは同時に、鋭く厳しい哲学者批判を開始する。そしてE・フォールはここに明確なヒロイズムを読み取る。彼は書く。

モンテーニュは、以上のことから「記憶を満たすことしか考えず、判断力や良心は空っぽにしておく」<sup>(22)</sup>固着した学問に宣戦布告し、あらゆる種類の哲学者に復讐の鉄拳をふるう。彼らは書物がなければ何もできないのに、いかに行動すべきかを人に教える主張する。そして自ら行動を起こすことはない。従つて彼らは愚鈍よりも始末の悪い存在だ。また彼らはおよそ自己を疑うということを知らず、新しい、生き生きとした思想の強襲を受けた時も、何がなんでも、死んで干涸びた思想の城砦を死守しようといきり立つのである。こうして激しく非難するモンテーニュには、古い思想の殻を破つて噴水のように絶えず心の奥底からわき上がってくる、原始的ではあるが抗しがたい力に溢れる個としての人間精神の浄福が見えるのだ。無論これはその懐疑的精神に負うところが大きい。いかなる権威にも惑わされず、事物を正視する精神。個人的信仰と言い替えてもよいかも知れない。並通の信仰すなわち政治的、宗教的、哲学的あるいは道徳的信仰とは一線を画する彼の知的姿勢によつて少しずつ深みを増す個人的信仰。この確乎不動の姿勢によつて、彼はあらゆる社会階層、党派、制度を突きはなし、支配し、彼固有の自由を創造する。この自由は、各人が自己コントロール、精神強化、高貴化をそれによつて確かなものとする生きた諸能力を熱心に鍛練することによつてのみ到達し得るもの、尊敬すべきものとなる。このように哲学者の保守主義を徹底的に批判し、右のような自由によつて既存の知識、思想、習慣等を再考し、独自の判断

を試みるモンテーニュは日付けにおいても、その質においても最初の知的意識といえよう……。

E・フォールの言う「最初の知的意識」は何を基準としての「最初」なのか判然としない。文字通り、世界で最初なのか、ヨーロッパかフランスか、不分明であるが、「近代的意識」という語も使用されることなどから判断すれば、ヨーロッパ近代の最初の知的意識と解するのが妥当であろうか。ともあれ彼が、モンテーニュの中に近代社会の起点に立つ知性の巨人を見ていることは間違いない。彼はそのことを「知性のヒロイズム」の言葉で示す。引用しよう。

「知性のヒロイズムがある。あらゆるヒロイズムの中で最も困難なものだと私は思う。これはその内的獲得物のこちら側にあるものも向こう側にあるものも皆、敵にまわす危険を孕んでいるのだ。あの不吉な時代、モンテーニュが語り得たこと、語りたかつたこと以上に強力な議論を他所に見い出せるとは思えない。これは「精神的優柔不断」という彼の伝説に反するが、私はそう思う。またモンテーニュに語らしめたこと、多くの者が聞きさえたこと、それを理解するのはなおさら難しい。恐らく、まさに最高の思想を眼の当りにした人々の心を把えるあの尊敬の念、この思想がその最も重要な仕事を成し遂げるより先に、これを包囲し、十字架に懸けようとする人々の企てを阻止するほどの、あの尊敬の念を引き合いに出してみる必要があるのかも知れない。また恐らく、この思想が人々の頭上はるかを越えゆくために、人々はそれがそこに在ることすら知ることができず、ましてはこの思想の持つ革命的な力を理解することなどできないのだ、と考えてみなければならぬだろう。」

この時代には、異端審問にかけられ、多くの者がさらし台や絞首

台に吊るされ、火炙りにされた。エチエンヌ・ドレ (Etienne Dolet) (一五〇九—一五四六)、ミッシェル・セルヴェ (Michel Servet) (一五一—一五五三)、ジョルダン・ブルノ (Giordano Bruno) (一五四八—一六〇〇) などの思想家も次々に火刑台に送られた。このような時代にあつて、モンテーニュもその思索を続けたのである。『エッセー』は十七世紀に禁書目録に入れられることになるが、彼の生前には、ローマに旅した時、『エッセー』の中に多く見られる「運命」という語の削除を求められただけで、(モンテーニュはこの指示には従わない) 概ね好感を持って迎えられる。異端の問題も、思想上の過激さも認められなかったのである。寧ろ、その逆で、すでに見てきた通り、「優柔不断」の人とされていたのである。E・フォールはこの見解を否定し、同時代、最も強力な議論を展開した思想家とみなしている。右の引用は、決してわかりやすい文章ではないが、モンテーニュの思想が、同時代人たちの理解を越える程のものであり、それが故に彼は、その思想の大胆さにも拘らず、十字架送りになるのも免れたのだ、と言っているように思われる。彼は『エッセー』のどのような所に、このような「革命的な力」を見い出すのであろうか。E・フォールはモンテーニュの魔女裁判批判もその一つに掲げている。この点は、拷問の批判や、ブラジルの食人種擁護の発言と共に、この思想家の思想の先見性、批評眼の確かさの例として、よく問題にされるものである。E・フォールはこれに加えて、モンテーニュの思考に見られる「不道德性」と「キリスト教破壊」を上げる。ここではこの後者の指摘を少しく見ておきたい。

『エッセー』には宗教戦争批判は度々展開されるが、直接的な宗教批判は見当たらないように思われる。確かにモンテーニュはあまり熱心

な信者ではない。モンテーニュの塔は一階が礼拝堂、二階が寢室、三階が読書室になつてゐるが、礼拝の時には不精して一階には降りず、一階と二階を分ける床(天井)にあけられた小穴を通して、寢室にしながら参加したという不謹慎な面を持つ。しかし、自分のことをカトリック教徒と明言しており、無神論者と言うことはない。それにも拘らず、E・フォールはモンテーニュがキリスト教に「死の一撃」を与えたとみる。彼は言う。

キリスト教を滅ぼすのに、モンテーニュが自分では、平凡なキリスト教擁護者の「弁護」を通してキリスト教を守る企てであると主張している、あの有名な断章ほどに貢献した文章は世界広しといえども一つもない。彼は自分のことを反キリスト教徒と呼んだことはないが、この断章において、この宗教にまさに死の一撃を与えたのである。彼は次のような恐るべき文章を書く。「我々がキリスト教徒であるのは、我々がペリゴール人だとかドイツ人だとかいうのと同じことだ。ただ信じぬという勇氣を持たないというだけの理由で信じられていただけのこの奇妙な信仰<sup>(24)</sup>」彼は一つの議論から他の議論へとピョンピョン跳びぬき、厳格な神学者(レーモン・スボン)の目的原因説的主張を不動のものともなすかと思えば、その一行あとでは、彼の腰を挫くような議論を展開する。この点はサント＝ブーヴ *Sainte-Beuve* がすでに喝破している。<sup>(25)</sup>要するにモンテーニュは次のように言いたいのだ。キリスト教とは袂を分かつべきである。キリストの王国はこの地上には属さない。人間はキリストではないし、キリストになれるものでもない。人間は聖パウロになることもロヨラになることも望まない。人間は人間であつて、「定めなく揺れ動く、多様な」存在なのだ。ある時は崇高であり、ある時は卑劣だ。そしてしばしばこの両者が同時に混

在している。確かにキリストは人間の中で模倣するに最もふさわしい存在だが、もし今再び彼がここにもどつて来るとしたら、彼は言うだろう。「私は模倣されるために来たのではない。」そうなのだ、模倣すること、それは裏切ることだ。こう考えて、モンテーニュはキリスト教との関係を断ち切つたのだ……。

E・フォールは概略右のように述べている。「エッセー」のこの「レールモン・スピノの弁護」の章は、実際、神の問題は弱い人間理性の認識能力を超えたものであるとされ、あれこれ議論しても全く空しいとみなしている。通常、この立場はフイデイスム、信仰絶対論と言われるものだが、E・フォールは、これはキリスト教を人間界から追放したものと見る。

モンテーニュは別の章で「私は存在を描かない。私は移行を描く」という言葉も残しているが、これもE・フォールの解釈に沿つて見直すことができるように思われる。人間は神の被造物であり、揺ぎない必然の存在であるというキリスト教の通念に抗するように、モンテーニュは「移行」を描くという。そこには世界は永遠の動揺であり、そこにおける人間もまた何の必然性も持たぬ揺れ動くもの、という東洋の無常観にも似た認識が垣間見られる。従つて、E・フォールが、「モンテーニュはキリスト教に死の一撃を与えた」とか「キリスト教を破壊した」とかの過激な表現で描き上げたモンテーニュ像は、この一文によつて、更にその説得性を増すといえよう。

以上、簡単に見たように、E・フォールはモンテーニュを最初の近代的精神とみなし、その功績を高く評価する。<sup>27)</sup>その懐疑的思考法の徹底によつて、新たな知の地平を切り拓くべく果敢に戦つた「知性のヒーロー」とみなすのだ。P・H・シモンの描いた、遠慮がちな英雄像

とは対照的に、きわめて鮮明な像が浮かび上がつてきた。P・H・シモンが慎重すぎるのに対し、こちらは些か大胆すぎる印象もなしとしないが、筆運びに迷いがないだけに、興味深く読ませる力を秘めていると言えよう。

だが、この両者が描き出したモンテーニュの「自画像」がそうであつたように、「エッセー」の中には非英雄主義的な要素も避けがたく存在することも認めなければならないであろう。P・H・シモンのモンテーニュ論の中で、死についての立場が論じられていた。彼はそこに英雄的なものを読み取つていたが、すでに指摘したように、これにはパスカルの反論があり、検討を要する。そこで最後にこの問題を整理したい。

### 三、死の問題

『エッセー』には死に関する語が実に頻繁に登場する。「死」の女性名詞 *mort* が四四一回、動詞不定法の *mourir* が一四三回、形容詞の *mort, morte* が合わせて五九回。その他 *mortalité, mortel* 等の関連語を含めると、殆んど各ページにこの語が登場していると言つても過言ではない。それほどに死はモンテーニュに親しいテーマであつた。十六世紀後半、宗教戦争のただ中であつて、死は日常的に存在している。戦乱とペスト禍は田舎の城館に隠棲しようといまいと関係なく襲つてきた。刎頸の友、ラ・ボエシもわずか三二歳にして、恐らくはペストで死んだ。最愛の父、ピエールもラ・ボエシの二年後に死ぬ（二五六五）。妻フランソワーズ・ド・ラ・シャセーヌとの間に生まれる子供たち（六人全員女兒）も次女レオノール一人を除いて次々に死ぬ。さらに軍人の弟サン・マルタンは戦地においてではなく、何とボ

ール遊びの際中に、頭にボールを受けてあつけなく死んでしまう。またフランス王家の方も、アンリ二世のあの有名な不慮の死に始まって、続くフランスソワ二世、シャルル九世も相次いで斃れた。

このように自己の内外において次々と人々の死に見舞われたモンテ一ニユだが、自らも落馬事故（一五六九）で危く一命を失いかけた体験を持つ。それ故、人間の生のはかなさ、空しさを否応もなく知らされたいたモンテ一ニユだけに、この問題が常に思惟の中心を占めていたとしても不思議ではない。それと、執筆を始めて数年後に発病し、その後持病となつて、最後まで、発作の時に死の苦しみを与えた結石も大きな要因であろう。彼は言う。「私は何が聞きたいといつて、人間の死に際のこと以上に聞きたいものはない。どんな言葉を残したか、どんな顔をしたか、どんな態度を示したかといふことくらい、好んで聞きたいと思うことはない。歴史書においても、私がこれほどに注意して心に留めおく箇所は他にない。もし私が著述家であつたなら、私は種々さまざま死に関する注釈本を書いたであろう。人間に死ぬことを教える者は、人間に生きることを教えるであろう。」<sup>(28)</sup>

独立した「死の注釈書」はできなかったが、『エセー』には実際、古今の武将たちの英雄的な死、不慮の死、農民の死、自殺などさまざまな死の逸話が数多く蒐集されている。このようにして、死を見つめ続けるモンテ一ニユだが、その対応の仕方は次第に変化し、執筆の初期と後期では全く正反対の立場を取るに至る。

初期の重要な断章は「哲学することは死を学ぶことである」（I—20）。ここでは先にP・H・シモンの論の中で見たように、決然として死に対決しようとするストア的精神、攻撃的な近代的自我が鼓吹される。死は打ち倒すべき敵なのである。「この敵は、逃げ腰の臆病者も、堂々

たる勇士をも同じように捕える。それ故、しっかりと足を踏まえて、これをくいとめ、戦うことを学ぼう。」<sup>(29)</sup>だが一体どう戦うのか。それは敵の不意打ち——これが敵の最大の強みだが——を阻止するために、常に死を思い、死に馴染み、死を手なづけてしまふという作戦だ。事実ははるかに想像を超えるから、どんな立派な剣術でも、その場に臨めばたいして役には立たない、と批判する者があつても構うことはない。「あらかじめ死を思うことは、自由を思うことである。死ぬことを学んだ者は、隷属することを忘れた者である。死ぬことを知ることによつて、我々はあらゆる従属と拘束から解放される。」<sup>(30)</sup>ここまで言い切り、死に対する人間の必然的受動性を、精神の能動性で克服しようとする、果敢なる挑戦的自我的表明。

ところが、死を自我の敵として、これに英雄的に立ち向かうストア派的傾向は後年、全くその影をひそめ、逆の対応が姿を現わす。たとえば「人相について」（III—12）の章に見える次の文章は第一巻二〇章の考え方を自ら批判する形になつてゐる。日く、「われわれは死の心配によつて生を乱し、生の心配によつて死を乱す。（…）実のところ我々は死の準備に對して備へてゐるのに過ぎない。哲学は『常に死を眼前に見よ。死をまへもつて予見し、考察せよ』と命じ、そのあとで、この死の予見や考察に傷つくことのないようにと、それに備へる規則や注意を与える。医者や方と同じだ。医者も医薬と医術を用いたために我々を病気にするので。（…）哲学者たちはいくらでも自慢するがよい。『哲学者の一生は死の考察である』<sup>(31)</sup>と。だが私の考えでは、死はなるほど末端ではあるが、生の目標ではない。生は、それ自身において、それ自身が目的であり、目標であるはずだ。」<sup>(32)</sup>

かつての立場を完全に覆すこの発言には驚きを禁じ得ない。もし

「エセー」三巻をモンテーニュが言うように三時間で通読するほどの人があるとするれば、これほどまでに明らさまな矛盾の放置に混乱し、そして怒り出すであろう。だが、本書が記述の一貫性に主眼を置いて書かれた、いわゆる体系的著作ではなく、「私は移行を示す」にも語られたように、その時の瞬間瞬間の判断を記述する試みの全体であることを知る者は、反発より寧ろ、前後二〇年間におけるこの重大な変化に感動を禁じ得ないであろう。モンテーニュは続けて言う。「もしあなたが死ぬことを知らないとしても、あなたはそれを気に病むまでもない。自然がその場で、完全かつ十分に教えてくれるであろう」<sup>33</sup>死と厳しく対決しようとした自我は姿を消し、「自然」が導き手として登場する。これは「神」、「運命」の語と共に人間を超えた力を持ち、影響を及ぼしたり、導いたりする何かを示す語として『エセー』に親しい語であり、その「母なる自然」のイメージが、J・J・ルソー(Jean-Jacques Rousseau)に影響を与えたとされるものである。今やモンテーニュの自我は限りなく小さくなり、自然に身を委ねる。その全き受動性。非英雄性。そして、ここにおける「自然」はどうやら、素朴な民衆の振舞いの中にその姿を現わしているようだ。「私は近所の百姓のうち誰一人として、この最後の時を過ごすのにかなる態度と確信で臨むべきかについて、思い煩っている者を見たことがない。自然は彼に、いよいよ死に臨む時以外死を考えるな、と教えている。しかもその瞬間には、長い間の死の予見と死それ自体とで二重に苦しめられているアリストテレスよりも、彼の姿の方がずっと美しい。……」その顔にも、その声にも恐怖の色はなく、まるで必然に身を任せているようであり、不可避の断罪として受容しているようだ<sup>34</sup>。

長年に渡り哲学書を読み、多くの実例を検討したモンテーニュが、

これこそ模範とするにふさわしいと結論したのは、数ある哲学思想のどれでもなく、何と農民たちの素朴な死の受容の姿であった。そこには、無知とはいえ、不可避のものを不可避として静かに受け入れる健康な知恵が見られるという。この姿に深く打たれたモンテーニュは、それまでのあらゆる哲学的死生観を打ち捨て、宣言する。「これからは愚鈍学派を支持しよう。これこそが我々に約束された学問の究極の果実である」<sup>35</sup>無論ここには、想像力を刺戟され、好奇心にかられ、死の影に恐れおののかずにはいられなかった自己自身に対する皮肉や苦しい思ひも込められていようが、彼はこの徹底して非英雄的な農民の姿に深い共感を隠さないのである。

この立場は知性の怠慢として非難されるべきであろうか。一章で触れたパスカルの批判はその一つであろう。だがモンテーニュは最初から、パスカルの言う「安楽な」死をよしとしたのではなく、長い思索の末にここにたどり着いたのである。それだけにこの非英雄性には非常に重い説得力があるように思われる。

ルネサンスとは言うまでもなく、人間の無限の美と力の再発見であり、その礼讃であった。モンテーニュもまた、その最後に位置して、強烈な自我を主張した。しかし絶えざる戦乱の中、狂気に翻弄され大量殺戮を繰り返す人間、魔女狩りに異様な情熱を注ぐ人間、大海を渡りアメリカ大陸の住民と文明を次々に滅ぼした、しかもキリストの名において滅ぼした金の盲者たち、流行病でバタバタと斃れゆく人間等々をつぶさに見たモンテーニュは狂気の凄まじさとそれに対するあまりにも無力な人間理性を認めざるを得なかった。そしてまた、どう足掻こうとも、支配しようとも支配されようとも、すべての者が最後には死に至るのだ。人間には自己自身にも、外界にもどうにも支配しきれないも

のがあることを認めぬわけにはいかない。自我がいかに声を張り上げようと無駄なものが在る。特に死は、哲学が何と言おうと、乗り越えられるものではない。こうしたことから、強力な自我の主張とは反対の「愚鈍学派」(escollie de bestine)なる皮肉な提唱も生まれたのだらう。

## 結 び

以上、モンテーニュに英雄主義が語れるか否かの問題を検討したが、常識的、教科書的イメージに反して「英雄モンテーニュ」の像も作成可能であることが示されたと思われる。しかしP・H・シモンの逡巡にも明らかかなように、「エセー」の著者は到底一筋縄で捕えられる存在ではない。英雄的な面も独立して抽出することは困難で、絶えず非英雄的なものが混在、交錯しているのが見られた。従ってこれは非英雄を内に孕んだ英雄、あるいは逆に英雄性を孕んだアンチ・ヒーローと言う他はないであろう。P・H・シモンの言う「英雄主義の領分」は確かに認められたが、同時にそれは、非英雄の領分でもあり、互いを截然と分かつのは不可能だ。

ところで、第二章で見たように、E・フォールはモンテーニュから近代が始まったとみなしていた。「近代」とは何か、の問題は非常に困難なテーマであるが、近代的な精神、近代的自我を「ものごとに対して受け身になるのを恥辱とみなし、自己の知性、判断力を総動員して徹頭徹尾、能動的にこれに立ち向かう主体」と一応理解するならば、モンテーニュはいわば自ら近代を開き、自ら近代に終止符を打ったと言ってみることが出来るかも知れない。第三章で見た、死に対する彼の二つの姿勢は近代的自我の強い主張とその否定とを象徴的に示して

いるように思われるからだ。神と宗教を遙か天の高みに押し上げ、遠ざけることによって、神の呪縛から解放された人間は、事物を全て自己の問題として見、これに対処することができるようになった。全てが自己自身で解決可能という信念も生まれた。「人間の思惟は宇宙をも包み込む」というわけだが、モンテーニュは一方では、すでに人間の思惟、理性の限界を鋭く認識していた。このことから、自我の強力な主張のすぐ傍で「母なる自然」への帰順も語られるのである。

最近出版された「死の位相学」<sup>(36)</sup>において、吉本隆明氏は、トルストイの「イワン・イリイチの死」を取り上げ、死に臨むイワンの心に真のやすらぎを与えるのは、意外にも、素朴な食堂番の農夫であった点に注目している。そして、そこに暗示される静かな、受動的な死の姿に深く共感しているように思われる。イワンのこの態度は言うまでもなく、城館を取り巻く葡萄畑で働く農民たちに教えられ、彼らを手本としたモンテーニュの姿にぴったりと符合する。吉本氏は一九八〇年代の今この時、非英雄的、受動的死に深い共感を隠さないのだが、モンテーニュ没後やがて四〇〇年、この長い時間を挟んだ近代の入口と近代の果てにおいて全く同じ思想が語られるのは何を意味するのであろうか。

一九八五年 十月

## 注

- (1) Pierre-Henri Simon, *Le Domaine Heroique des Lettres Francaises X<sup>e</sup>-XIX<sup>e</sup> siècle*, 1963, Armand Colin. 以下この著者名はP・H・シモンと記す。彼は一九〇三年生まれ、一九七二年没。
- (2) Michel de Montaigne, *Les Essais*, 1572~1588. 引用に用いたテキストは、*Les Essais de Montaigne, Tome I - 2*, 1978, Puf である。

翻訳に際しては原二郎氏訳（筑摩書房）と松浪信三郎氏訳（河出書房新社）を参考にさせていたのだ。

- (3) 『エセー』第三卷第二章、以下III—2と記す。
- (4) Elie Faure（一八七二—一九三七）医学を学んだあと、美術史研究に進み、美術史研究家となる。直観的批評に定評がある。本稿で検討するテキストは *Montaigne et ses trois premiers-nés Shakespeare, Cervantes, Pascal, 1926, publié chez Grès, éd. Livre de Poche, 1978.*
- (5) 『アンリ四世とルイ十三世治下における英雄主義と文学創造』 *Héroïsme et Création Littéraire sous les Règnes d'Henri IV et de Louis XIII, Colloque de Strasbourg, Actes publiés par Noëmi Hepp et Geroges Livet, 1974, Klincksieck* とらう論集でルシアン・ブラウン Lucien Braun やアンドレ・ステグマン André Stegmann らがこの語の定義を試みているが、多義性が指摘されるばかりで、これといったまとまった定義はなされていない。
- (6) モンテーニュの曾祖父ラモン・エイケム Ramon Eyquem はボルドーの乾物商人であった。商売で富裕となり、一四七七年にモンテーニュの城館を購入した。貴族への道はここから始まるわけで、高々一〇〇年というところだ。
- (7) P・H・シモン前掲書第四章、モンテーニュ論の章題
- (8) 『エセー』II—21 「無為に対する非難」
- (9) 同右II—21
- (10) 同右I—14 「幸・不幸の味は大部分、我々の考え方によること」
- (11) 同右I—37 「小カトーについて」
- (12) バスカル『パンセ』 *Pensées de Pascal* プランシユウィック版63、ジャック・シュヴァリエによるブレイヤッド版77
- (13) 『エセー』III—9 「空しさにについて」

(14) 同右II—33 「スプリナの話」

(15) 同右III—7 「高貴な身分の不便なことについて」

(16) 注(4)を参照。

(17) 『エセー』III—5 「ウエルギリウスの詩句について」

(18) モンテーニュは腎臓結石、尿道結石の持病をもっていた。この病気に関する記述が『エセー』には数多く、死に関する考察をはじめ、モンテーニュの思考に少なからぬ影響を及ぼしている。発病は執筆生活に入ってから、一五七六年頃と考えられている。

(19) 『エセー』III—3 「二つの交際について」

(20) 同右I—32 「天命を判断するには慎重しくすること」

(21) 同右I—56 「祈りにについて」

(22) 同右I—25 「ペダンチズムについて」この引用文の動詞の主語は一人称複数形 nous である。E・フォールは主語をはずして部分引用しているが、モンテーニュのテキストはこうなっている。Nous ne travaillons qu'à remplir la mémoire, et laissons l'entendement et la conscience vide. 従って文法上は、モンテーニュ自身も記憶を満たすことしか考えず、判断力や良心を空っぽにしておく者の一人であるということになる。常識的な解釈ではこの「我々」は修辞上の技法であり、モンテーニュは除外しなければならない。E・フォールもそのように解している。だがこの部分の直後に挿入される後年の加筆部分で「驚いたことに、この悪かさは私自身の場合にびつたりと当てはまる」と書いていることも合わせてみると、単純にはモンテーニュを除外できない、微妙な問題だと言える。

(23) 『エセー』II—12 「レーモン・スポンの弁護」

(24) 同右II—12

(25) サント＝ブーヴはその『ポール・ロワイヤル』第三の書において、モンテーニュを論じ、特に「レーモン・スポンの弁護」の章の分析からモン

- テーニュが本質的に無信仰者であった旨述べている。そして仮定の話として、モンテーニュの葬儀には、シャロン(Charron)・ベイル(P. Bayle)はじめ多くの作家、思想家が参列するであろうが、キリスト教徒として、彼のために祈るのはバスカルだけであろう、と述べている。Sainte-Beuve, *Port-Royal, texte présenté par Maxime Leroy*, 1952, éd. Pleiade, Tome I p.p.870.
- (26) 「エセー」Ⅲ—2 「後悔について」
- (27) リュシアン・フェーヴルの著作「十六世紀の無信仰の問題(ラブレーの宗教)」(一九四二) Lucien Febvre, *Le Problème de l'Incroyance au XVII<sup>e</sup> siècle (La religion de Rabelais)*, 1942, 44 「十六世紀をめぐって近代精神を語ることは不可能だし、ましてその無神論をその言葉の現代的意味で語るわけにはいかない」という立場を取り、E・フォーレルと相容れない。この点は論を改めて検討したい。
- (28) 「エセー」Ⅰ—20 「哲学することは死ぬことを学ぶこと」
- (29) 同右Ⅰ—20
- (30) 同右Ⅰ—20
- (31) 原文ラテン語、キケロ「トゥスクルム論議」Ⅰ—30
- (32) 「エセー」Ⅲ—12 「人相について」
- (33) 同右Ⅲ—12
- (34) 同右Ⅲ—12
- (35) 同右Ⅲ—12
- (36) 吉本隆明「死の位相学」一九八五年六月、潮出版社